

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 19 日現在

機関番号：64303

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2016

課題番号：15K12793

研究課題名(和文) 現代社会における篤農家の研究 特質と社会的役割の地域間比較

研究課題名(英文) A study on "Tokunoka" : Inter-area comparison of their characteristics and social roles

研究代表者

石山 俊 (ISHIYAMA, Shun)

総合地球環境学研究所・研究部・プロジェクト研究員

研究者番号：10508865

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：フィールド・ワークに基づく考察の結果、以下の2点が明らかになった。篤農家の多経験性:本研究において明らかになった篤農家の特徴のひとつに、その多経験性をあげることができる。篤農家の多経験性とは、農業(あるいは「篤」を有する現在の生業)にたどり着く前に様々な職業を経験していることにある。篤農家の他者性:篤農家は、「地域の慣行」に対して「革新的」な技術や考え方を持つ場合がある。これは、前述した篤農家の多経験性と関連するものであると考えられる。

研究成果の概要(英文)：This research could point out two important characteristics of "Tokunoka" (Motivated farmer) by fieldworks.1) Multiexperience of "Tokunoka" ; Before starting agricultural practice, "Tokunoka" have experiences in several kinds of working and migrating experiences. These experiences lead "Tokunoka" to the innovator not only agricultural sense, but also social standing point and their way of thinking.2) Alterity of "Tokunoka" ; Due to their multiexperience, "Tokunoka" don't banded by local conventional way. This alterity often make "Tokunoka" as innovators of agricultural technics and social-cultural change.

研究分野：文化人類学

キーワード：篤農家 社会的役割 地域活性化

1. 研究開始当初の背景

本研究参加研究者はこれまでフィールド・ワークを基盤とした研究を、地域の篤農家との関係を構築しつつ継続させてきた。それぞれの研究において、篤農家の地域社会における重要性が認識されるに至った。研究代表者と分担者が執筆した縄田・篠田編(2014)では、サハラ・オアシス、サウジ・アラビア西南部山岳地帯、タンザニア海岸村における篤農家に関する個別の考察がなされた。こうした経緯を経て、「篤農家」の特質と社会的役割の学術的解明が重要な課題であるとの認識に至った。

2. 研究の目的

篤農家の現代社会における役割として、以下の3点に関する考察を進めることを目的とした。

新技術の導入

新価値観の導入

外部世界との調整役。

篤農家は地域変革のための重要ステーク・ホルダーとして位置づけられうるが、その立場によって外部者と地域住民との懸け橋とも障害ともなりうる。

本研究では、「篤農家」の形成過程、地域環境・歴史との関連、「篤」の質、社会的立場の地域間比較によって、その現代的役割を解明し、地域問題解決のために篤農家が資する役割を明らかにする。本研究では分析用語として「篤農家」という語を使用するが、対象を農業従事者に限定せず「篤漁家」、「篤林家」、「篤志家」も考察対象に含めた。

また、篤農家という用語は、一般的には広く使用されるが、学術的用語として用いられることは稀であった。本研究で篤農家の学術的理解を起点として研究成果の広い社会還元を目指した。

3. 研究の方法

フィールド・ワークに基づいて、研究代表者、研究分担者がそれぞれ現代社会における篤農家の特徴と社会的役割に関する考察を進めていった。主な国内調査地は、愛媛県西条市、福井県小浜市、京都府綾部市、高知県大豊町、秋田県潟上市、秋田県大潟村であった。

研究のためのフィールド・ワークは基本的に研究代表者、研究分担者が個別に行い、その成果を統合する形でおこなわれたが、グループによる共同調査も実施した。

たとえば、秋田県潟上市、大潟村における共同調査(石山、田中、縄田)、福井県小浜市における共同調査(石山、宮寄)などである。

このような共同調査の利点は、「篤農家」を主題としながらも分野横断的理解とその共有が即時的に可能である点にある。

4. 研究成果

フィールド・ワークに基づく考察の結果、以下の2点が明らかになった。

篤農家の多経験性

本研究において明らかになった篤農家の特徴のひとつに、その多経験性をあげることができる。篤農家の多経験性とは、農業(あるいは「篤」を有する現在の生業)にたどり着く前に様々な職業を経験していることにある。

その中でも、特に注目したいのは、Iターンと呼ばれる人々による新規就農である。

Iターンとは、「理想のライフスタイル」をもとめて、それまで縁がなかった、または希薄であった地域への移住形態である。そしてIターン者の多くは、農業に従事する。その際、専業農家となる場合と、他の職業との兼業になる場合がある。いずれにせよ、農村において農業を実践するということは、地域の人々との社会的結びつきはもちろんのこと、農地の賃借・借用などで文化・経済的結びつきを欠かすことはできない。

Iターン者はこうした地域社会とのつながりを創り上げながら農業をなりわいとして確立していくのである。しかし、自らが理想とする農業と、地域の慣行の齟齬に悩むこともある。その齟齬を以下に乗り越えていくのが、Iターン者に共通する問題意識である。

篤農家の他者性

篤農家は、「地域の慣行」に対して「革新的」な技術や考え方を持つ場合がある。これは、前述した篤農家の多経験性と関連するものであると考えられる。

たとえば、福井県小浜市で法人化農業を営む株式会社Wは、地域出身者・居住者が中心となって設立された組織である。2016年現在123ヘクタールの耕地をおよそ10名のスタッフで管理している。農地の大半は、高齢化によって耕作放棄された土地である。10人のうち1名は、ハローワークの仲立ちで入社したが、あとの9名は地域の出身である。しかしその全員が、家業であった農業(稲作中心)を引き継ぎながらも、農業以外の事業主、あるいは農業以外の職業に従事していた。このことは、前述の多経験性と関連するが、この多経験性こそが、「地域の慣行」を超えた新しい試みを進めるための原動力となるのである。

その核心は、経営に関する関心と実績にある。株式会社Wでは、農業経営の健全化のために、農産物の付加価値化とコストダウンを目指している。前者のためには販売力の強化、後者のためには生産性向上が必要であると認識している。

そこで生産物のブランド化、販路の開拓とともに、耕作放棄された集落の農地の集積化を進め、現在の経営形態を確立した。

地域の出身者であっても、他業種に従事した経験を農業経営にも活用しているの

である。

しかし、株式会社Wの経営的成功(少なくとも現時点では)の理由は、地域出身者による起業と経営という地縁性にもある。

地域出身者が説得するからこそ、農地の地権者が、農地賃貸契約に同意する素地があり、メガファーム化に対する経営的展望を明確に説明することも地権者の同意を得ることに結びついている。

他者性は多経験から発つすると考えられるが、地縁で結びつき続けているからこそ、地域の「土地持ち離農者」に対する信頼獲得と農地借用・集約化に関する同意をとりつけることができたのである。

今後の展開

以上2点の篤農家の現代的特点を、歴史的相対化することを目的として、今後の研究の展開を図っていく予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

縄田浩志(2016)「いまを生き続ける篤農家たち「篤農家」がつくる地域社会」報告」『CLAS Discussion Papers』66, 72-88.

荒木良一、宮崎英寿、石山俊、岸上光克、大坪史人(2017)「食と暮らしの研究会」の活動報告」『学芸』63, 9-13.

〔学会発表〕(計6件)

縄田浩志(2015)「展示活動を通じた交流 国立科学博物館における企画展示「砂漠を生き抜く」」『日本沙漠学会第26回学術大会, 2015年5月23-24日. 秋田カレッジプラザ.

縄田浩志(2015)「沙漠における栽培品種を通じた文化交流誌: ナツメヤシとモロコシ」『生き物文化誌学会第13回学術大会, 2015年6月21日, 中央大学理工学部.

田中樹(2015)「アフリカにおける地域開発支援に関する技術論の課題と展望 人の暮らしと土壌や生態環境とのかかわりをめぐって」『日本土壌肥料学会2015年度公開シンポジウム「土壌はアフリカを養えるのか」』2015年9月11日, 京都大学.

田中樹(2015)「地域資源や在来知を生かした実践技術をつくる 西アフリカ半乾燥地での砂漠化対処の取り組みから」『第186回APEXセミナー』2015年10月31日, 国際協力機構市ヶ谷研究所.

石山俊(2016)「なぜ今、「篤農家」に注目するのか」『環境月間: 北大サステナビリティウィーク 北大・地球研合同セミナー「地域システムの中のバリューチェーン: その創発と

駆動」2016年10月28日, 北海道大学.

石山俊・三村豊(2017)「家族で語るIターン: 綾部の半農半蕎麦、安喰さん一家の座談会記録より」『公開シンポジウム 食と暮らしのものがたり テロワールを活かす』2017年1月27日, 和歌山大学松下会館.

〔図書〕(計4件)

ISHIYAMA, Shun(2015) "Energy Issues from a rural Perspective" NAWATA, Hiroshi(ed.), *Human resources and Engineering in the Post-oil Era, A Search for Viable Future Societies in Japan and Oil-rich Countries of the Middle East*. Shokadoh Book Sellers, Kyoto. 86-97.

NAWATA, Hiroshi(ed.) (2015) *Human resources and Engineering in the Post-oil Era, A Search for Viable Future Societies in Japan and Oil-rich Countries of the Middle East*. Shokadoh Book Sellers, Kyoto., 111p.(English), 110p.(Arabic).

縄田浩志(2015)「村入りで感情的になる 現地調査の流儀をめぐって」関根久雄編『実践と感情』春風社, 165-194.

石山俊ほか(2016)「地域に根ざす「篤エネルギー一家」から地球環境を学ぶ」田中樹ほか編『人々と出会い考える - 総合地球環境学研究所 TD 座談会記録 -』, 総合地球環境学研究所, 187-204.

〔その他〕

6. 研究組織

(1) 研究代表者

石山 俊 (ISHIYAMA, Shun)
総合地球環境学研究所・研究部・プロジェクト研究員
研究者番号: 10508865

(2) 研究分担者

田中 樹 (TANAKA, Ueru)
総合地球環境学研究所・研究部・教授
研究者番号: 10231408

Steven McGreevy
総合地球環境学研究所・研究部・准教授
研究者番号: 10700172

縄田 浩志
秋田大学国際資源学研究所・教授
研究者番号: 30397848

宮崎 英寿 (MIYAZAKI, Hidetoshi)
総合地球環境学研究所・研究部・プロジェクト研究員

研究者番号：30455232